

「グリーンカラー」のちから*

本日、4月2日の日本経済新聞にはトーマス・フリードマンの『グリーン革命:温暖化、フラット化、人口過密化する世界』(伏見威蕃訳)の大々的な広告が掲載されている。著者のフリードマンは、ピューリッツァ賞を三度も受賞した敏腕のジャーナリストであり、前著の『フラット化する世界』は世界的なベストセラーとなり、日本でも最近しばしば引用されている。今回の書物はそのフラット化論をさらに発展させ、地球温暖化に取り組む「グリーン革命」を、ITとET,すなわち情報技術とエネルギー技術とを新結合することによって、世界レベルで本格的に取り組むべきことを説得的な文体で書き下ろした最新の書物であり、全米ですでに100万部を突破しているそうである。



Green For All, Clean Energy Corps-Jobs, Services, and Equal Opportunity in America's Energy, 2008より引用

こう書くと本稿はその書物の紹介だろうと思われるかもしれないが、実はそれ自体が目的ではない。私はフリードマンのこの本を熱狂的な思いで読んだので、書きたいことは山ほどあるが、それはこのエッセイの紙幅には収まりそうもないし、また近く日経新聞に私の書評も載るので、以下では本書の隠れたテーマである「グリーンカラー」のことを書きたいと思う。「グリーンカラー」とは、企業で働く人々を「ホワイトカラー」と「ブルーカラー」とに分ける用語法を念頭においたとき、広い意味の環境問題、つまり世の中の「グリーン化」に取り組む人々を「グリーンカラー」という階層で括り直し、その層の仕事となる「グリーンジョブ」をつくることの重要性を強調するために生まれた言葉である。

具体例で述べよう。グリー

ン戦略がアメリカや日本を再活性化する最善の政策であるためには、それはエリートや上位のミドルクラスだけではなく、経済の梯子のもっとも下の段にいる人々にも仕事を与え、彼らのエネルギーを引き出し、彼らの協力をえなければならない。例えば、地方自治体がすべてのビルに高いエネルギー効率を要求するようになれば、最新技術を使った新規のビルを建設するだけでなく、既存のビルにもソーラパネルや断熱材や耐寒構造などを取り付ける「レトロフィット」、すなわち既存の設備やデバイスを新規のものに交換する改修工事が猛烈に増えることになる。こうした仕事は、情報技術などが習得できずに失業している層に貧困から抜け出す道を用意するし、彼らがその仕事の中で技術を学ぶ意欲があれば、梯子のさらに上に登っていきける可能性もある。

アメリカの「クリーンエネルギー団体」(The Clean Energy Corps)という国家レベルの政策集団は330億ドル(約3兆3千億円)の予算を要求して新エネルギー政策を進めようとしているが、そのうち292億ドルは、上述のような「レトロフィット」の仕事である。また、建設関係の仕事でいうと、単純な建築労働から技術職までの10層になっていて、単純労働では時給10.24ドルであるが、電気技術を習得すれば14.76ドル、さらにボイラー技師になれば19.09ドルというように、努力次第で梯子を上っていくことができる。

こういう層が「グリーンカラー」であり、彼らの仕事が「グリーンジョブ」である(写真参照)。著者のフリードマンがこの種の仕事をとくに重視するのは、「グリーン戦略はアメリカ人すべての納得を得られないかぎり、成功に必要な勢いやスケールが得られない」と考えるからである。彼によれば、現在のアメリカは新エネルギー政策に本気で取り組んでいない。漸進的なイノベーションではなく、幾何級数的なブレークスルーを生み出すためには、私たちの身近な貧困をも打ち負かす戦略でなければならない。グリーンジョブをつく



京都府特別参与、一橋大学名誉教授

今井 賢一

* 本稿の一部は、冒頭に示した書物に関する私の書評(日経新聞の5月10日付の読書欄に掲載予定)と一部重複することをお断りしておきたい。

ることは、次のような連鎖効果がある。

- ・社会的に恵まれない若者に仕事を与える
- ・低所得の家庭の光熱費を軽減する
- ・もっとも経済的打撃を受けやすい階層の住宅の価値を高める
- ・上記によって地域の経済社会が安定する

本稿のはじめに述べたように、フリードマンはITとETを結合し、「スマートグリッド」というエネルギー・インターネットを創ることによってアメリカのエネルギー・システムを一新させる壮大な提案をするのだが、それはかつてのマンハッタン計画やアポロ計画のように、政府が招集したエリート技術集団によって設計される計画ではない。市場の力をうまく利用し、社会の底辺にいる貧しい人々をも巻き込んで成功させようという斬新な構想である。

しかし、「エネルギー政策」と「貧困の解消」という二つの困難な問題を同時に解くというようなことが、果たして可能なのだろうか？ フリードマンは、その困難を承知しながらも、彼の議論を補うために次の書物を読んで欲しいという。

その本とは、まだ邦訳はないが、日本語で書けば、ヴァン・ジョーンズ著『グリーンカラーの経済：一つのソリューションが、いかにして二つの難問を解決しうるのか』と題した書物である。¹

早速アマゾンから取り寄せて読んでみると、なるほどこの本は具体的で説得力がある。地球の持続的な発展のために切迫した課題を抱えている五つの主要分野、すなわち「エネルギー」「食料」「廃棄物」「水」「輸送」の各個別分野で先に述べた「レトロフィット」の仕事を中心にグリーンカラー・ジョブがどのようにつくられ、どのような団体が仕事を斡旋しているかを述べつつ、次の文章に集約されるような彼の信念を、手を替え品を替えて敷衍している。

「ほんとうのグリーン経済には、使い捨ての資源はいっさいない。使い捨ての種、使い捨ての住宅地、使い捨ての若者もない。(中略) グリーンという政治目標は白人と黒人を団結させる。その核となっている希望が、すべての人々を育てるからだ」。

私にはフリードマンがこのようなかたちでグリーンカラーを強調する理由はよくわかる。彼の前著『フラット化する世界』の中心テーマは、世界を平らにするITの力と、同じITが新しいミドルクラスを作り出すとい

う二つの論点だった。しかし、アメリカも日本も強いミドルクラスが登場した反面、ミドルクラスから脱落する層が生まれ、いわゆる格差問題が深刻になってきた。

彼が期待した新しいミドルクラスとは「自分の仕事がアウトソーシング、デジタル化、オートメーション化されない人」のことであった。幸いにも、「レトロフィット」の仕事はアウトソーシングできない。耐寒構造にするビルをばらして船に載せ、中国に運んで、改装が終わったら戻すというわけにはいかない。デジタル化もオートメ化もできない。「だから、国内で人を雇って作業するしかない(中略)何百万ものビルを耐寒構造にし、ソーラパネルを取り付け、風力発電所を建設する。」

二つの難問を同時に解決する仕事の突破口はここだ。この意見に私も全く同感である。

フリードマンは、その突破口を押し開け、ITによる普及力を結び付ければ、今こそ本気で環境問題に取り組むことができるという。インターネットの普及を振り返ってみれば、1987にはたった5千のネットワークしかなかったが、1995には5万と100倍に飛躍し、翌年の1996には15万、つまり10年たらずで150倍に成長した。

環境問題に関して、2007の夏には誰も「グリーンカラー・ジョブ」という言葉を聞いたことがなかった。しかし、その後の大統領選挙戦の過程では、民主党の三候補ははっきりとその言葉を使い、「グリーンカラー・ジョブ」をつくりだすプログラムを語ったのである。オバマ就任後は、さらに、勤労世帯への減税などミドルクラス重視の政策スタンスと共に、グリーン・ニューディールへの取り組みを明確にした。どうやら、アメリカは本気になったようだ。日本も政局争いなどしている余裕はないはずである。中央が頼れないなら、地方からでも、いま出来ることに本気で取り組むべきだ。



Green For All, Clean Energy Corps-Jobs, Services, and Equal Opportunity in America's Energy, 2008より引用

1 Van Jones, *The Green Collar Economy: How One Solution Can Fix Our Two Biggest Problems* (Forwarded by Robert F. Kennedy), Harper One, 2008.